

その使命として生れて來たのが日曜學校、兒童教會、子供會等であるのです。これ等の組織内容中その最重要位置を占むるものに童話がある。これについて平生思つてゐる事の一端を述べて見ませう。

童話を話す者の中に、なあと相手は子供だ、位の軽い考へでくだらない話をして面白がらせたり、笑はせたりする事にのみ骨折つて、一寸も兒童の心理なんか考へない、つまり前に述べて來たやうな事柄を考慮しないでやつてる人が見受けられます。こんなのはどうかと思ひますネ。又一方社會人の中には、童話そのものを理解しないものがあり、それ位ならまだしも、甚だしいのになると危険視してゐる者さへある。又さういふ人が子供相手としてゐる教育者の中に迄見受ける事のあるのには全く驚く外はないです。然しこれは社會人の無理解とのみするにはあまりに虫が良すぎはせんでせうか。といふのは童話を語る者の中に講談家や落語家になつた方が出世が早いと思はれる程の人が居た事にも一因あると思ひますネ。この無理解を根底から

解くには結局正しい童話、美しい童話の普及に依つて童話の眞價値を体得させる事にあるんぢないでせうか。これが童話家の將來の一責任だと思ひます。君達の周圍の子供達の中からは將來、畏くも陛下の樞機に參する國務大臣も居れば、或は艦艦を率えて國威を海外に輝す將軍もあり、或は大宗敎家、大哲學者、大科學者、大實業家等も居ることであらうし、又これ等の偉人を生む女丈夫、良妻賢母も居る事であらう。兒童はこのやうな將來恐るべき人の基礎的修養の時代なんです。全く大聖人の仰せられた通り全く子に過ぎたる寶は御座いませんよ。遠からず兒童敎化に携はる君達も亦私等も、その責任たるや實に富獄より大なりと言ふべしですね。漫談になつて了つて申譯ありませんでした。機會があつたら今度は兒童問題やら、童話の方面やら、夫々堅に深く語り合ふことにして、今日はたゞ表面をお話したに過ぎません。すつかりお茶が冷えました。さあ熱いのを取換へませう。

—昭和拾年仲秋 厚德寮の一室にて—

晩秋に題す

齋 藤 順 義

秋！秋！澄徹の秋、詩人は泣き宗敎家は悟り、哲學者は思策に耽るの秋、吹き渡る風將に肅殺の氣を生ず。

秋を満喫せんとして歩を錦繡の寺平の丘に運ぶ。
六百五十有餘年の昔、大上人をして『哀れを催す秋の暮には草

の庵に露深く檐に集く蜘蛛こぐまの糸玉を連ぬき峯の紅葉いつしか色深うしてたえだえに傳ふ懸樋の水に影をうつせば名にしおふ龍田川の水上也かくやと疑はれぬ(身延山御書)

と詠せしめられた聖地身延は、日一日と秋の深さを増して行く、峨々として聳ゆる天子ヶ岳や鷹取山、または眼下に蜿蜒として白龍の如く錦繡の山裾を巡ぐつて流れる富士川、黄塵萬丈の巷に齷齪と日夜を送迎する都人士には味はふ事の出来ぬ境地、それは山間に住む者のみに與へられた天の恵である。

遙か杉木立の間から秋の陽を受けて銀色に照映えるトタン屋根の文化住宅が見える。人里離れた此の丘の上にこれはまた心憎い風流人がと思ひ、落葉を踏んで其の門を訪れふと表札を見ると、豫期に反して筆太に『醒悟園』と認たゝめてある。此れが火災の後に再建せられた本妙臨師の聖居の遺跡であらうか。

百數十年前「棄恩入無爲眞實報恩者」の大乗的精神より年老た父母を遙か江戸に残し、道を求めて深草に元政和尚の遺蹟を訪ひ、更に亦大聖人の魂魄永遠に鎮まります本地身延に居を移し、此處「鬼が窟」の山頂に庵を結び大自然をこよなき伴侶と爲し、純朴なる里人に微妙の法輪を轉じその高潔なる聖の姿には無心の鳥獸すら慕ひよつたと言ふ。

愛宗の赤心と死身弘法の大決定心とを以て末法濁世に臨まれた聖者の遺風を偲ぶ何等のよすがも無いと言ふ事は一抹の悲哀を感じずには居られない。

門を去る事數歩凌々たる老松の下に縷々として立ち昇る紫煙

晩秋に題す

に包まれ苦むした聖者日臨和尚の奥津城に額づき靜かに冥目すれば、名聞財利を願はぬ和尚の舌端火を吐く愛宗の叫びが！その面影が！髣髴として臉に浮ぶ。

噫偉なる哉聖者、上人の清魂今何處にか在す。

現今の宗教界は一部宗教復興の聲のみ高く、その實蹟は頗る擧らず反つて既成宗團打倒の聲喧しく、或人は「宗教復興とは排佛毀釋の變名なり」と云つて居る位である、斯の如き現狀下に於て何時迄も梨下偷安の夢を貪り、自覺なく、權威なき宗教家、否、宗教に名をかる徒輩は、自ら墓穴を掘るの譬の通り近き將來に於て必らず清算される運命にある。教團を護持する佛教徒に確固たる信念が無い爲に所依の眞法をも暇つけ社會から倦んぜられるのだ、そして一步一步没落の道を辿るのである、此れに反して教義内容に於ては兎も角新興類似宗教が時代の人々に歡迎され熾に躍動する所以は、守備よりも攻撃的精神が熾であり犠牲的行爲に自己満足を得るからである、此等は皆線香花火式な一時的の存在でしかあり得ないが然し斯の如き内容のブアーな附焼刃に過ぎないものが、假令一時的にせよその生命を縦横に發揮してゐるのに、諸佛出世の本懐、永遠不滅の眞法を所依とする我宗の如きが少しも奮はないのは何是だらうか；そこには思ひ半に過ぐるものがある。若し我が教團人が驕然として佛陀悟入の精神に、また大上人が一切の情誼を捨て、迷へる衆生の爲にあらゆる大小の難を堯爾として甘受せられ、刺_す鳥と虫とは啼けども涙落ちず、日蓮は泣かねども涙閑なし(實相

鈔〕只南無妙法蓮華經の七字五字を日本國の一切衆生の口に入れんとはげむばかりなり、此即ち母の赤子の口に乳を入れんとはげむ慈悲なり〔八幡鈔〕との大慈大悲の御精神の下に眞に目醒なかつたなら、我不愛身命但惜無上道の大信念を以て大法を弘通し今日の基礎を固められた先師先聖の御本意に反するのみならず、我が宗門の上に光輝ある歴史から永遠に葬り去られる時が將來する事は明らかである。宗門をして此の没落の段階より救ひ出だし泰山の安きに置くもの、それは名聞財利を求めて反省する事を知らぬ老僧政治家ではなくして、只感激に満ちた純眞な血潮に燃ゆる我々青年佛教徒の一大使命であると思ふ、我々には分に過ぎた僧階も名譽もいらぬ、唯だ願ふところは宗門の興隆と大聖人の偉大なる御理想を少しでも多く實現せしめたいと欲するのみだ。

感謝法悦の實現

人生に於ける無上の幸福は、信仰の体験によつて得られる感謝法悦の實現にある。世間のあらゆる醜惡なる慾望に超越して、心、清淨に感謝法悦の境地に安住して、本佛に歸命禮拜する其の敬虔な態度こそ、本化信仰の究極の目的であり、人生最大の理想でもある。譬へ巨萬の富を擁し、最高の名譽と無上の權力とを獲得しても、煩惱の常闇に迷へ、世間の慾望に齷齪して徒

佛法を忘れて世法にのみ執着する徒輩にどうして此の一大聖業を完成する事が出来得やうか、それは恰も猿を離れて肝を求むるの愚である。

將に今、世は混沌として眞の宗教にオアシスを求め、宗教家目醒よ！と我等に迫つて居るのだ。曉の鐘の音と共に無自覺から自覺への一大飛躍を試みようではないか。

『止眼斷眠以つて悔を千載に残す事勿れ』『二陣三陣つゞけよかし』の聖訓を体して立正安國一天四海皆歸妙法の大幟を翻懸と別頭の丘に打ち樹てようではないか。

宗門淨化、宗門發展の血潮に燃ゆる宗教家の卵達は斯く絶叫するのである。

(一〇、一〇、一七 統學寮にて)

下 邨 顯 淨

に一生を費やす人こそ眞に憐れむべき人である。

佛は法華經に、

「今此三界皆是我有乃唯我一人能爲救護」と、又は「每自作是念乃速成就佛身」と、説かれて居る。

即ち本佛は、三界の衆生に對しては主、師、親の三徳を具して居られ、然して衆生を救済するを以て本懐とせられ、他に餘念